

文字と線の研究 : 哲学的文字論の試み

FURUYA, Toshihiko / 古屋, 俊彦

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

15

(終了ページ / End Page)

26

(発行年 / Year)

2015-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011816>

文字と線の研究 哲学的文字論の試み

古 屋 俊 彦

一 活動状態から固定性への踏み越え

一・一 表現の奇妙な欲求

芸術家の作品制作の様な表現行為について考えてみるならば、表現の欲求は非常に奇妙なものであると言わざるを得なくなる。表現の欲求は我々の突出し逸脱した本能と見なすしかない。目的も根拠もない欲求に従わなければ、新しい物を生み出す事はできない。意識的な表現者ではなくても、誰でも持つ様なつまらない自己主張も含めて、我々は、意味の無い表現の欲求にまみれている。そして、それは、生物の進化の原則を超えている。表現の欲求は、個人や集団の自己実現などという了解可能な生やさしいものではない。生きるために役に立たない。それがあっても存続

できない。意味も理由も根拠も合理性も無い物を、とりあえず受け入れるしかない。それは、破滅的な本能である。生物の生存への欲求といった単一化できる傾向とは異質なものである。ただし、物質の進化が生物から次の段階に向かっていると考えれば、この奇妙な欲求にも納得できるかもしれない。生物の限界を超える欲求を生物が持っているならば、それは生物の次の段階を考えなければ理解できないだろう。例えば、ぶれながら同じものを反復するだけの遺伝子の存続にとどまっていた生物が、真に固定的で加算的な蓄積へと向かっているのだと考えれば、より広い観点から、この傾向が解釈できるかもしれない。この研究は、そのような見通しに基いて、我々が何万年も前から残してきた、活動ではない物を、全体的な傾向として解釈する試みである。

一・二 遺伝子を超えるもの

自然が作り出した最も高度な物は、複雑な高分子化合物による非周期的結晶である。単一結晶、準結晶、巨大分子と、物質の構造が複雑になり、その終着点に蛋白質や遺伝子のような非周期的結晶がある。遺伝子は非周期的結晶として非常によくできている。しかし、ぶよぶよとして頼りないものである。簡単に崩壊してしまう。固形物の結晶ではなく、弱く柔軟な巨大分子の塊である。結局、遺伝子は役割を終えると短時間で消えていき、後に残るのは、生体の崩壊過程でしかないがそれなりに強固な化石である。自然が作った非周期的結晶は、活動するものとしては遺伝子が限度だった。結晶の複雑化の傾向は、固形物の耐久性を犠牲にしていたのだが、その弱点を克服し、これを超えるものを探し出すか作るかして、それに我々が自らを置き換えようとしていると考えれば、表現の欲求にも理由があるように思えてくる。活動を犠牲にして固形物の耐久性へと積極的に置き換わろうとするならば、我々は、別の存続形態を得られるだろう。ただ、このような事を、芸術家の個人的な欲求の中にある本能と考えてしまったら、生きるための生物の欲求と混ざり合ってわからなくなってしまう。個人は、様々な欲求の奴隷で、しかも失敗だらけであ

る。欲求がそれらしいものを生み出すには、何度も実験を重ねなければならない。ほとんどの人は、いやになつてやめてしまう。だが、諦めない人もいる。そのような人が、突出し逸脱した表現者となるのである。

一・三 我々のとんでもない発明 文字と煉瓦

我々が種として作り上げ残してきた最もとんでもないものは文字である。文字は約五千年前に作られたとされているが、それと同じくらいの時期に作られたもう一つのとんでもないものは煉瓦である。煉瓦は約五千年前に発明されたのだが、煉瓦を組む配置は、もっぱら反復的であつたため、固形物としての非周期的結晶の決定打にはならなかった。煉瓦は建物の形を支えるためだけの、目的が限定された物として扱われ、それ自体が非周期的結晶の代替物にはならなかった。それを非周期的結晶として仕上げる事は可能である。私は、実際に煉瓦を使って、美術作品として、非周期的結晶を作る実験を行った。長い時間の中で存続までは確かめられないのだが、その全体としての作品の様相は、煉瓦の一時的な目的にも共に合致した物である事は確かめられた。下地を支える機能と同時に、別の固定的存続の機能が非周期的結晶として重ね合わせ可能であつた事は、長い時間の中で多重的な蓄積をも予想させるものと

なった。煉瓦は、都市の発明に伴って初めて作られた物だったが、文字は、それ以前に遡る事ができる。そこに非周期的結晶の次の段階が具体的に現れている。

一・四 生物の次の段階 非周期的結晶 (aperiodic crystal)

ここで使っている非周期的結晶という概念は、物理学者エルヴィン・シュレディンガーが一九四三年にダブリンで行った講演を元に書かれた『生命とは何か』という本の中の言葉を元になっている。その中で、シュレディンガーは、生命の本体を純粹に物質的なものと考えていけば、必然的な帰結として、生命は、反復的ではない非周期的結晶と言わねばならないと述べた。この言葉は、物理学者たちを分子遺伝学につながる研究へと導いた。そして、一九五三年にデオキシリボ核酸の構造解析が発表され、遺伝子の本体が突き止められ、非周期的結晶という考察には結論が出てしまったように見なされている。しかし、非周期的結晶という概念には、活動としての生命を踏み越える重大な示唆があると考えられる。シュレディンガーは、非周期的結晶の具体的な物として染色体や蛋白質を想定していたのだが、この概念を巡る考察の帰結は、それだけには止まらない。むしろ、これは、遺伝子の次の段階を、図らずも示唆

してしまったと考える事ができる。生物の本体は、機能する物としては、極めて脆弱な巨大分子の形態を取らざるを得なかったが、長い時間に渡って存続する機能しない物としては、強固な固形物としての非周期的結晶を作る事ができたとも考えられる。それは、自然に生まれたものの行き着く先としては、化石でしかない。だが、人為的制作物として、積極的に非周期的結晶が作り出されているならば、それは、生命の本質をより強固に担う物の姿として考察する事が可能である。それは自然に生まれる物ではなかったが、自然に生まれた生物が意図的に生み出した物でしか有り得なかった物であり、だからこそ、それは生物の次の段階になり得るのである。

一・五 遺伝子の限界

我々が必死に反復を繰り返している人間の遺伝子は、十萬年以上維持された継続性と言える。長い時間の継続性の本体を遺伝子と考えれば、我々は遺伝子として生きていると言う事もできる。しかし、人間の遺伝子は、ただか約三十一億個の塩基配列である。四種類の塩基の組み合わせだから、一個あたり二ビットで、約八百メガバイトの情報しかない。三百ページの本にすると千冊分くらいである。人間が作って残してきた文書は、かなり以前から、既

にそれ以上の情報量を蓄積している。情報の量は、生命の複雑で高度な機能に関しては、決定的な意味を持たないかもしれないが、生命が機能の活動状態を踏み越える段階を考へるならば、それは大きな意味を持つ。生命の継続性が、活動状態の継続にとどまるならば、結局は一つの種の遺伝子を、我々は、量的にも質的にも超えられないだろうが、活動状態を諦め、固定状態へと覚悟を決めて踏み越えるならば、その限界は克服できるのだ。

一・六 活動状態の限界

非周期的結晶の量的な制限は、遺伝子によつては超越されない。活動状態の継続に埋没するならば、それはどうにもならない限界である。しかし、活動状態ではない停止状態へと我々が交代しようとするならば、遺伝子ではできなかった固定性と蓄積の無際限性が確保できる。そのような非周期的結晶の成果が、文字、更には、その一般形態である線であつた。固定して残された物は、他にもあるが、人為的な物の存続は、全て、文字と線の存続の仕方に起因する。人為的に作られて固定した物の存続の仕方が、文字と線の存続に集約されている。そのため、文字と線の研究は、我々が生命を踏み越え次の段階へ進んでいた事を明らかにするだろうし、その事を意識的に更に前へ進めるため

の手引きとなるだろう。

二 文字は言語を写したのではない

二・一 文字は言語を写したものだという説明

文字は音声言語の時間的な記号連鎖の転写であると説明される。文字は言語に従属した言語の一部分と見なされている。しかし、文字の連鎖の形が音声言語によるものかどうかを実際に確認した人はいない。言語音が機能する場である、聴覚から意識される記号は、直接観察する事ができない。聴覚に唯一受け渡されている物理的音響は途切れがなく多重的なものである。言語音が発せられる発声器官の運動は、物理的な音響としてしか伝わらず、発声の意図と制御の形は消えていく。聴覚器官で受け取られる言語記号を想定して、言語機能の構造を考へるしかないのだが、記号の線的な連鎖が、聴覚器官で突如として、あるいは全く変形されて作り出されていると、無理して考へるしかなくなる。しかし、その想定以外に、線的な連鎖の形は、どこにも根拠を持っていない。結局、言語が本当に文字の線的な連鎖のような形をしているのかどうかを改めて問い直す時、そうではない事が解ってくるのである。

二・二 音声言語は線の形をしているという説明

音声言語が線の形をしているという説明は、言語学者フェルディナン・ド・ソシュールの講義を元にして一九一六年に出版された『一般言語学講義』に、かなり強調された形で収録されている。ソシュールの説明では、言語の線の形は、音的素材の致命的な制約であるとされている。消極的な原理ではある。しかし、そこから連辞と連合が可能になる原点として、ソシュールはこの原理を重要視している事が、講義の草稿の中にもうかがえる。確かに、連鎖的な線の前後関係の中で要素が相互に関係を持ち、さらに各々の要素が記号全体の中の差異として配置されるという二重構造は、その発生地点が明確に限定されている方が成り立ちやすいような気がする。そのため、ソシュールの原理とした線の形は、あくまでも作業仮説として扱って良いだろう。

二・三 言語を連鎖的な線と考えた場合の基本単位

音素 (phoneme)

音声言語は線の形であるという説明は、従って、それ自体は、それなりに役割を持っていたようである。しかし、問題なのは、ソシュールによって、連鎖の線を分割した最

小の切片と考えられた、音素という単位である。音素は、いわゆる子音と母音の事だが、言語機能の基本要素として、純粹に差異だけを持った単位と考えられたものであり、音声とは異なる。複数の音声のひとつとまりにした単位という説明と、複数の音声に共通する特徴という説明がある。音素は言語ごとに異なるため、これを基本単位とすると、それ以上は言語の違いを共通性の中で説明する余地はなくなる。

二・四 言語を音声特徴の重合と考えた場合の基本単位

弁別素性 (distinctive feature)

ロシア出身の言語学者ロマン・ヤコブソンは、具体的な音響の分析によって、音素の研究を強化し、そこから、更に言語の違いを超える共通の単位を導き出そうとした。ヤコブソンが参照したのは、音素を言語音の共通の特徴として説明しようとする、アメリカの構造言語学者レナード・ブルームフィールドによる「音素は弁別素性の束である」という言い方だった。弁別素性というのは経験的に観察できる音声の最も単純な特徴という意味だったが、ヤコブソンは、言語として機能する基本的な特徴を最小限にまで絞り込む仮説に、それを応用した。ヤコブソンは、ギンナー・ファントとモーリス・ハレの協力を得て、一九五二

年の『音声分析序説』という論文において、十二個の基本的な弁別素性を特定した。

二・五 音声言語は線の形をしていない

弁別素性は、単純な二者択一であり、同時に重なり合う事によって機能を成り立たせるもので、それによって言語音の錯綜状態がそのまま言語機能へとつながっている事も説明できた。弁別素性の重なり合いという言語の単位に関する新しい理解は、従来の粒子状の記号連鎖への置き換えといった聴取の手續きに関する理解を払拭するものだった。それ自体が連続的で重なり合っている言語音の聴取を、音素の連鎖に置き換えるような事は、そもそも必然的ではなかったのである。つまり、音素は、言語機能において必然的な役割を持たなかったという事になるのだ。

二・六 音素は音声言語の単位ではない

音素の連鎖が必然的ではないとなると、音素を表記していると思われる文字の説明も成り立たなくなる。例えば、ローマ字やギリシャ文字のような音素表記とされている文字は、言語の単位を表記したものではなかったのである。そして、そもそも弁別素性が表記された事はないのだから、言語と文字は、基本単位として一致した事が無かった

と考えざるを得ない。つまり、文字は言語の転写ではなかったものであり、今まで考えられていた従属関係は、そもそも存在しなかったのである。

二・七 文字の連鎖線はどこから来たのか

線の形が言語によるものではないという事は、とりあえず言語の分析に新しい領域を開いた。ヤコブソンやハレによる研究に引き続き、ハレはノーム・チョムスキーと共に、音素という概念を取り外した言語の基本要素の構築性を図式化していく生成音韻論を、一九六八年に『英語の音型』という本によってまとめた。言語研究の側では、言語は線ではないという理解を元に、より原理的な構築性の仮説が一気に作られる事になったのだが、文字の中に取り残された線の形が、問題として解消するわけではなかった。線の形が、言語からではないとなると、いったいどこから来たのかという事は、問われる事がなかった。順当に考えれば、線は文字独自の構造と考えるしかない。そして、言語を表記していると信じられていたからこそ、言語の文節に見えた音素表記から先に進まなかった文字の分析は、必然的に更に内部に進み、より具体的な姿を見極めなければならないのだ。そこで見えて来るのが、文字の筆記線である。文字は機能の文節的な塊を最小切片とするのでは

なく、筆記線が不定型に集積しているものとみなくてはならない。言語が弁別素性で成り立っているのであれば、文字は筆記線で成り立っていると考えるしかない。その筆記線が言語と関係ない事は明白である。つまり、文字は言語を写したものでは有り得ないのである。

三 文字は欠損線の末裔である

三・一 音素表記の起源 ギリシャ文字とフェニキア文字

いわゆる音素表記文字と呼ばれる文字の始まりはギリシャ文字であると説明されている。しかし、音素は言語の単位として必然的ではなかった以上、ギリシャ文字は言語音の分析による成果ではなかった事になる。ギリシャ文字は独自に作られたものではない。ギリシャ文字は、紀元前十世紀以前に確立されていたフェニキア文字の流用だった。フェニキア文字は、セム語族の言語であるフェニキア語に対応する、子音だけを表記した文字だった。セム語族の言語は、その特徴として母音の弁別が基本母音の三つに限られる。セム語族の言語に対応する表記は、基本的に母音を表記しない。その仕組みは、古代エジプト文字から引き継がれていると考えられる。また、地域的および文法的な偏

差を吸収するには、子音だけの表記の方が有利であったとも考えられる。このような事情から、フェニキア文字が母音を表記しなかった事には、それなりに合理性があった。しかし、インド・ヨーロッパ語族の言語であるギリシャ語は、母音の識別を多く必要とする。ギリシャ語に対応する表記としてフェニキア文字を流用したギリシャ文字では、子音の弁別として必要のないフェニキア文字を母音表記にあてて、線的な連鎖として母音表記を行った。結果として、ギリシャ文字のギリシャ語に対応した表記は、母音の分だけ引き延ばされる事になった。連鎖が引き延ばされた表記の形は、色々な意味で非合理的であり、決して言語の機能に添ったものではない。例えば、連鎖を過剰に引き延ばした現在の英語に対応する表記は、その長さのせいで識字障害を引き起こし易い。フェニキア文字の流用過程で、ギリシャ文字以外に母音表記が無かった訳ではなく、線的連鎖として母音を表記するやり方も、アラム文字、ヘブライ文字などには既に有った。現在のアラビア文字には、連鎖的に引き延ばさずに補助記号を上下につける母音表記が必要に応じて使われる。また、インドの文字では、アラム文字からの流用に際して、子音表記の周りに母音の表記を付け加える音節表記が作られた。このように、ギリシャ文字以外では、非合理的な引き延ばしをせき止めながら、母

音表記を補う仕組みが作られていった。漢字以外のフェニキア文字以後の音節表記は、全てそのように母音表記を平面的に補って作られた。その考え方は、十五世紀に様々な文字の知識を元に考案された朝鮮のハングル文字にも受け継がれている。それでも文字には、非合理的な引き延ばしを拡張する傾向がある。言語への対応にまつわる合理性がそれを多少はせき止めるが、結局は線状の連鎖が限りなく延長されていく。この事は、文字の反言語的な傾向と考えるなければならない。ただ、フェニキア文字から始まるアルファベット系の文字は、文字の引き延ばしの末期的段階であり、その先の限らない連鎖線の延長は、文字独自の事情というよりは、言語を封印する事によってもたらされた巨視的な形であるようにも見えてしまう。言語と文字の関係と無関係は、連鎖線の延長の中で、あやふやになってしまふ。そのため、線的な連鎖そのものが言語ではないものから作り出された原点に遡って考察する必要がある。言語との対応以前に連鎖を引き延ばす傾向が確認できるならば、文字独自の事情が分離できるだろう。

三・二 言語との関係以前の文字 初期シュメール文字

約五千年以上前に作られた初期シュメール文字は、文字ができる過程を確認できる唯一の事例である。初期シュ

メール文字には順序がない。初期シュメール文字は、言語に対応したものではなく、帳簿や目録などの表に使われた記号だった。枠線の中に、順不同で記号が書き込まれ、おそらくものの記号と数の記号がともに一つの枠に入れられていた。次第に書き込みが細くなり、文書が大きくなるにつれて、枠線が横に引き延ばされていく。これは言語とは全く関係なく始まった、面状の記号枠の引き延ばしである。そして、線的な連鎖は、記号の連鎖ではなく、横の枠線すなわち罫線から始まっている。古代の文書は、エジプト文字も漢字も、文の量が多いものは、罫線を伴っているのが特徴である。文字が長い線的な連鎖を自立させるにあっては、罫線による補助が不可欠だった。この罫線の起源は、あくまでも、記号を順不同で収めるための枠線であり、横の線だけでなく縦の線も伴っている。そして、横の線を折ったんだものが縦の線を作るのではなく、縦の線の方が横の線よりも先行している。まずは、粘土板上で大きく縦に分割線を引き、その後、縦の分割線の間を横の横断線で区切るという形で、枠線は作られていく。従って、行を両脇で区切る線が、罫線よりも先にできた事になる。後に文字の順序となる序列は、枠線の序列によって、全体を分割する線から次第に中へ中へと入っていくのである。これは、言語の封印とは全く関係がない。このようにして

後からできた横の連結に対して、言語が更に後から封印されていき、言語は専らこの線的な引き延ばしの傾向に従って、限らない増殖にのみ荷担させられる事になる。

三・三 指標的記号の起源 粘土指標 (clay token)

初期シュメール文字では、枠線と順不同な記号という組み合わせが前提となっていた。記号に順序がなかったとしても、ばらばらな個々の記号の仕組みは、言語によるものとなるかもしれない。そこで問題となるのは、記号そのものの形状である。文字の基本要素である筆記線の起源が、ここで初めて問われる。まずは、枠と中身の関係は、複数の枠を一枚の粘土板に集めた形から、一つの枠だけを粘土板にするやり方に遡る事ができる。そこから更に遡ると、粘土による立体的な封筒と、粘土によるばらばらな指標的記号の組み合わせに行き着く。メソポタミアを中心とする広い地域の紀元前四千年紀以前の遺跡で、小さな立体造形による指標的記号が多数発見されている。この指標的記号を統計的に研究した、この研究の第一人者であるドゥニーズ・シュマン・ペセラは、これを粘土指標と呼び、経済活動の中での変換と貯蔵の伝票や帳簿に相当する物と解釈した。粘土指標の発展過程の最終段階では、球形の封筒に粘土指標が封印された形が見られ、内部に入った粘土指標の

個数が封筒の表面に記されていた。この封筒が、粘土板への面的な書き込みとしての初期シュメール文字を遡ったものであるならば、文字は、封筒の内部の、ばらばらな立体造形物から始まった事になる。粘土板の枠線を遡ると、立体的な粘土製の封筒の輪郭そのものがそれに相当し、そこには面の上の枠線は無い。粘土板の輪郭が、立体的な封筒の輪郭に遡るのである。更に遡ると、ばらばらな立体造形に、紀元前五千年紀以降、線の書き込みが行われる事が多くなり、これが唯一の面の上の線という事になる。このようにして、筆記線を遡ると、ばらばらな立体造形の上に付け加えられた線に行き着く。これが紀元前五千年紀以前になると、粘土指標は、線の書き込みの無い単純な幾何学的立体造形だけになる。書き込まれた線は、そこで消えていくが、そのかわり、立体造形を周りの空間から切り離す表層が、個々の記号の構成要素として浮かび上がってくる。ただし、伝票や帳簿のような、文明の中心的な役割をしている文字の筆記線による構成は、粘土指標が始まる約一万年以前にはさかのぼれない。しかし、少なくとも、ここには、文字が機能を持ったものとして生まれながら、機能を持たないものとして存続するという姿の端緒を見る事ができる。交換や貯蔵の触媒として使われたならば、この粘土指標は、元々それ自体に価値があつてはならないものだっ

た。交換や貯蔵の間の食い違いを無化し、使われた後は、全く無意味なものとして立ち去らなければならないものである。このような、機能に対して絶対的な廃棄物である関係が、文字の残存と蓄積と構築性と、その拡張の起源であり、その後の文字のあり方を全てに渡って決定した要因である。ただし、筆記線の起源としては、初めから機能を持たない線の書き込みが、更にそこから数万年は遡る事ができる。

三・四 純粹な線の継続 洞窟壁画と平行線の刻み

気候変動や農耕の開始などといった状況証拠で語られる事の多い一万年前から一万一千年前まで遡ると、それ以前と比べて明らかに残されたものの形が急激に変わっている。洞窟壁画が急に無くなり、造形表現が一気に衰えるのがこの時期である。その時期の後にメソポタミアを中心とする粘土指標の発明が続くのだが、洞窟壁画などの造形表現は約三万年前から約一万一千年前まで、ものの形を表す様に見える技法が長い時間をかけて完成していった。また、絵画が専らものの形を表す様に見えるものとして発展して行く間に、文明の中心的な役割を持たない純粹な線の書き込みが、継続的に作られていた。これは造形的な意味を持ちようがないほど純粹な人為的線であり、骨や石など

に刃物によって短い平行線を繰り返し刻み込むものであった。後の時代に現れた粘土指標の表面の線は、機能を持ちながら機能を解除する事によって、文明の中心において増殖を始めた線だったのだが、意図的に作られた線が、それ以前に、初めから機能を持たない形で成立していたという事は、非常に重要な意味を持っている。この造形表現の時代を通して、平行線の刻み込みは全く姿を変えず、なぜか普遍的な形となつて、その後の時代まで、世界中で作られ続けるのである。数を数える道具だという解釈もあるが、そうだとすると、その数は数えるものを最初から持たない奇妙な成立の仕方をしている。

三・五 線と彩色の起源

約三万年前からの時期は、文化の発展過程の中で、ホモ・サピエンスが単独で生きていく時代の始まりである。造形表現が次第にものの形を表す技法として発展していく傾向は、ホモ・サピエンスに固有のものであった。しかし、平行線の刻み込みは、ホモ・サピエンスがホモ・ネアンデルタレンシスを代表とする旧人から引き継いだ様に見える。ホモ・サピエンスが、作るものを専ら意味の有るものとしてしまう能力だけを發揮させたならば、純粹に役に立たず意味の無いものを作り出す事は困難だっただ

ろう。ホモ・サピエンスは、役に立たないものを、ことごとく役に立ててしまふ、あるいは意味の無いものに、ことごとく意味を見いだしてしまう癖を持っていると言える。役に立たないものを作り始めたのは、ホモ・サピエンスではなくホモ・ネアンデルタレンシスだったと考えられる。約五万年前のホモ・ネアンデルタレンシスの遺跡から、役に立たない制作物が色々と発見されている。埋葬の始まりと化石の蒐集は、生きて動いているものではなく、止まっている最終形に対する特別の関心を示している。生命が生命を踏み越えたものを参照するという行為が、遺跡の隣接関係の中で状況証拠として認める事ができる。また、彩色のための顔料を集めた痕跡も見られる。彩色は顔料の付加によって成り立つため、それ自体が隣接関係であり、彩色行為の状況証拠となる。それと同時に見られるものが、意味の無い平行線の刻み込みである。それ以外のものが、隣接関係でしかなく、確定的ではない中で、この平行線の刻み込みだけは、制作の意図が直ちに制作物に奪い取られ、一体化するという関係を作り出している。作る側が作るものを消費するのではなく、作るものが自立して二度と取り戻せないものとして残存するような、粘土指標の残存と同じような、自立した廃棄物の形状がこの刻み込みによって完成している。これは、ホモ・サピエンスが引き継いだも

の、意味として消費できない絶対的な実在性となり、その後、粘土指標の中で復活し、筆記線となり、それ自体が意味を持たない線の集積を限りなく増殖させ、ホモ・サピエンスをして、生命の次の段階へと向かわせる端緒となったのである。線の増殖への入れ替わりは、従って、我々が表現を始める以前から負わされた負債であったと言えるだろう。このようにして作り出された線の有り方は、時間を離脱したものであり、時間の形を写したのと考ええる事はできない。線は運動の軌跡ではなく、逆に運動は常に線の後からなざるものとしてだけ、線の形をしているのである、時間もそれと同様である。線は具体物であり、刃物による刻み込みである。線は幅があつて拡がりの無いものである。これは、我々にとって、実在しない面や立体とは異なる究極の実在である。我々が全面的に自分を譲り渡す動かないものとして、線は蓄積を続けている。

四 結論

四・一 線の問題

線はあらゆる領域に関わる表象の中の表象である。運動も時間も輪郭も境界も、線をなぞるか線を隠蔽するものとしてだけ形を持つ。線は消す事のできない絶対的な対象物

である。基本的な形は刻み込みであり、幅の内部と外部の関係において、有るものと無いものが逆転している。無いものは消せない。実際に、線は消されないように深く深く刻み込まれる。線はいくら集積の形を作り出しても我々が取り戻す事のできないものである。我々は線の前で活動の生態系に安住する事はできない。

四・二 線の文化と彩色の文化

我々の活動の側にある表現の形は、彩色の文化の中に見る事ができる。平行線の刻み込みと同時に始まったと考えられる彩色は、知覚における差異を増幅し記号化し分離する表象を作り出す。視覚の感覚器官で直接感知していないほど幅がある差異の増幅とその記号化は、聴覚の感覚器官で直接感知していないほどの差異の増幅および記号化と完全に同一の機能である。従って、文字の中に異質なものとして封印されない段階での言語は、状況証拠を通して彩色の文化に属する。そして、彩色の文化は、差異の増幅および記号化を積み重ね、絵画を生み出す。それに対して線の文化は、差異を消去し、物質化し、残存物を沈殿させる。文字は線の文化から生まれ、そこから文字の自律性が確定し、線の絶対性がその中でどこまでも貫かれる。文字はそのため、反言語的であり続け、言語機能を消化し、無いも

のとしながら増殖する。このようにして、文字は活動状態を停止状態へと取り込み続けるのである。

四・三 停止線への入れ替わり

我々は、このようにして、停止線の蓄積を究極の目的として生きている。停止線への譲り渡しは、約五万年前に済んでいて、後戻りはできない。しかし、停止線への踏み越えを完全性の実現と見るならば、その先に未知の活動を想定する必要がなく安心である。人工知能も自動機械も怪物も超人も想定する必要がない。停止線の非活動状態に帰属している事が人間の優位性と考えらるならば、奇妙な我々の欲求にも収まりがつくであろう。